

## 第12回酒田市スポーツ推進委員会研究協議会 「スポーツを通して考える共生社会の実現」報告書

日時:令和8年2月28日(土)

午後4時~6時

場所:ル・ポットフー

赤坂教育長のコーディネーターのもと、デフリンピックに出場した本市出身の3選手、市障がい者福祉の2名を迎え、市スポーツ推進委員会の堀会長を交えて次の3つのテーマでパネルディスカッションを行いました。

### 1. 「共生社会とはどんな社会か」

#### 赤坂教育長(コーディネーター)

共生社会とは、障がいの有無や年齢・性別等にかかわらず、互いの人権や個性を尊重し支え合う社会とされる。パネリストの視点からそのイメージを伺いたい。

#### 齋藤京香選手

共生社会とは「手話が当たり前に通じる社会」と考える。デフリンピックを通じて、手話を第一言語とする多くの仲間と出会った経験から、完璧ではなくとも「こんにちは」「ありがとう」といった簡単な手話が、障がいの有無にかかわらず交わされる社会こそが共生社会の姿であると思う。



▲齋藤京香選手

#### 齋藤心温選手

共生のためには、まず聴覚障がい者に関して言えば、聞こえない・聞こえにくいことへの正しい理解が必要である。聴覚障がいは外見から分かりにくいため、意図せぬ差別を受けることもある。全員が手話を習得するのは困難でも、映像への字幕付与といった「目で確認できる情報」を増やす工夫があれば、健常者と共に生きるハードルは大きく下がると考える。

#### 齋藤丞選手

「特別扱いも差別もせず、一人の人間として当たり前と一緒にいる社会」であると考えます。障がいそのものよりも、周囲の接し方ひとつで生きやすさは変わる。小さな思いやりや気遣いがあれば、障がい者は「自分もここにいていいのだ」と自然に感じられるようになる。



▲齋藤丞選手

#### 障がい者福祉会・眞田氏

生まれつき障がいのある方だけでなく、途中で障がい者となった方もいる。多様な背景を持つ人々と関わる立場から、障がいの種類に応じた適切な

補助は何かを常に考えている。互いに尊重し合い、何らかの形で助け合う仕組みがあること、お互いに寄り添うことが共生社会ではないかと考える。

### 障がい者福祉会・早坂氏

現在の建物のバリアフリー化は入口付近にとどまっており、内部の段差やトイレなど課題は多いと感じる。また、健常者と障がい者の間の理解の差という心理的バリアも根深い。これらを周知し、社会全体で解消していく必要があると考える。

### スポーツ推進委員会・堀会長

共生社会とは「違いをなくす」のではなく「違いを認め合い支え合う」社会であると考え。スポーツにおいては、ルールや環境を少し工夫(モルックやボッチャでの柔軟なルール適用など)することで、子どもから高齢者、障がい者までが同じフィールドで楽しめるようになると思う。

---

## 2. 「バリア(障壁)はどこにあるのか？」

### 赤坂教育長

障がいのある人は具体的にどのような場面で壁を感じ、またスポーツイベント等を運営する側はどのような配慮を行っているか。パネリストの意見を伺いたい。

### 齋藤京香選手

水泳の練習中は補聴器を外すため、コーチや仲間の声が聞こえないことで苦しい思いをしたこともある。しかし、何度も聞き返すうちに周囲が「紙に書く」「ジェスチャーで伝える」というように伝え方を工夫してくれるようになった。かつては補聴器を髪で隠し、聞こえないことに劣等感を抱いていたが、障害を“さらけ出す”ことで周囲に理解が広がり、生きやすい環境になっていった。普段の生活では、映画館で映画を見ようとしても、字幕がついていないため、ずっと雑音を聞いているよう。そこに大きな壁を感じている。

### 齋藤心温選手

幼少期、声が聞き取れずに友人に何度も聞き返した際に、「もういい」と会話を拒絶された経験があり、大きな壁を感じた。サッカーでは監督やコーチからの指示が重要だが、補聴器は後方からの音を拾いにくい。高校時代に監督の指示やチームの決め事が自分にだけ共有されず、一人だけ違うプレーをしてしまうなど、スポーツをする上での難しさを感じた。

### 齋藤丞選手

陸上の練習や生活面でも、特に大変なのはコミュニケーションをとること。練習中、監督の指示や仲間の声掛けが聞こえないことが大変だと感じる。また、姉(京香選手)と同様、字幕入りの映画が少ないことにバリアを感じて



▲齋藤心温選手

いる。「聞こえない人には声をかけにくい」という周囲の心理的バリアに対しては、自分から笑顔で積極的に話しかけることで、相手の不安を取り除き、仲間を増やしてバリアを壊していく姿勢を大切にしている。

#### 障がい者福祉会・眞田氏

身体障がい者がイベントに参加する際、会場へ向かう「交通手段(足)」がないことが最初の壁となる。福祉会の事業では酒田市による無料バスを活用している。また、イベント会場内の動線、段差、靴の脱ぎ履き用の椅子の設置に加え、手話・要約筆記による情報伝達の配慮を常に心がけている。



#### 障がい者福祉会・早坂氏

昨年、酒田市スポーツフェスティバルに参加し、運営側の準備不足で「楽しかった」とは言えないが、スポーツを通じた交流そのものが障がい者と健常者との間の壁をなくすきっかけにもなると感じた。

#### スポーツ推進委員会・堀会長

スポーツ推進委員会の主催イベントで障がい者の方の参加があったことはこれまでなかった。障がい者スポーツのイベントを単独で開催することは難しいと感じている。市障がい者福祉会や、ボッチャの普及が盛んな鶴岡市に協力をいただくなど、様々な連携を行うことでバリアフリーなスポーツ環境の実現に繋がると考えている。

---

### 3.「共に考える次のアクション」

#### 赤坂教育長

今後、障がい者スポーツを取り巻く環境や社会、今後どのように変わってほしいか。私たちにできるアクションは何か。パネリストの考えを伺いたい。

#### 齋藤京香選手

小中学校や高校、地域での講演を通じ、障がいのことを理解してもらうことが大事。そして、手話に興味を持ってもらい、街中で聴覚障がいのある方に出会ったとき、自然に手話で挨拶ができるようになってもらえたら嬉しい。

#### 齋藤心温選手

地方では依然としてデフスポーツやデフリンピックの認知度が低いと感じている。講演やデフサッカー体験会を地方で積極的に開催し、体験を通じて障がいへの理解を深める機会を増やしたい。

### 齋藤丞選手

障がい者スポーツを“特別なもの”ではなく“普通のスポーツの一つ”として見られる社会になってほしい。耳が聞こえなくても、工夫次第で前に進めることを、自分の競技人生を通して示していきたい。

### 障がい者福祉会・眞田氏

会員限定の枠を超え、一般市民や障がい者福祉会に未加入の障がい者の方にもイベントの呼びかけを行いたい。イベントに関わるボランティアも足りないため、広く募集したいと考えている。

### 障がい者福祉会・早坂氏

障がい者スポーツの正確なルールを把握し、指導ができる「パラスポーツ指導員」の資格保持者が庄内地方に少ないため、資格取得者を増やしたいと考えている。また、高校生・大学生などの若い世代にも障がい者スポーツ大会を周知し、活動の幅を広げたい。

### スポーツ推進委員会・堀会長

障がい者スポーツを支えるため、まずは障がいについて知ること、一緒にやってみることから始めたいと考える。そして、「どうすれば一緒にスポーツを楽しめるか」という視点で環境や仕組みを整えることも、我々スポーツ推進委員の重要な役割であると思う。

---

## 「障がいを持つ子どもたちへのメッセージ」

### 赤坂教育長

最後に、3選手から障がいがある子どもたちに対して何かメッセージをいただきたい。

### 齋藤京香選手

まずは自分が生まれてきたことに感謝してほしい。障がいとどう向き合うかは一人ひとり違う。失敗してもいいから、やりたいことにどんどん挑戦してほしい。私たち大人がその背中を支えていく。

### 齋藤心温選手

補聴器や障がいをコンプレックスに感じる必要はない。それを自分の“武器”だと捉えてほしい。パラリンピックやデフリンピックという輝ける舞台がある。自分にはできないと決めつけず、挑戦し続けてほしい。

### 齋藤丞選手

最初から完璧でなくていい。周りと違ってでもいい。やりたいと思ったら動いてみてほしい。スポーツには人間を変える力がある。一歩踏み出すことで、世界は変わる。

